

# 地域情報

## 日本流B&B「一宿一飯一趣」

### 北海道B&B協会



横市英夫氏  
(北海道B&B協会理事)

「B&B」とは Bed and Breakfast の略で、英国を発祥とし、欧米の農家の主婦らが現金収入源として空いている部屋と朝食を旅行者に提供する農家民宿のことをいう。

日本でも昔は「一宿一飯」という旅人を泊める習慣があったが、人へのいたわりやねぎらいが目的で、ビジネスであるB&Bとは少し違っていた。

北海道B&B協会は、この英国生まれの合理的な宿泊形態B&Bに日本古来の文化を組み合わせた、都市と農村の交流を目的とする日本流B&Bシステムを築くとともに、「農地トラスト」など農村地域の環境を保全し、魅力を高めるためのさまざまな取組みを行っている。

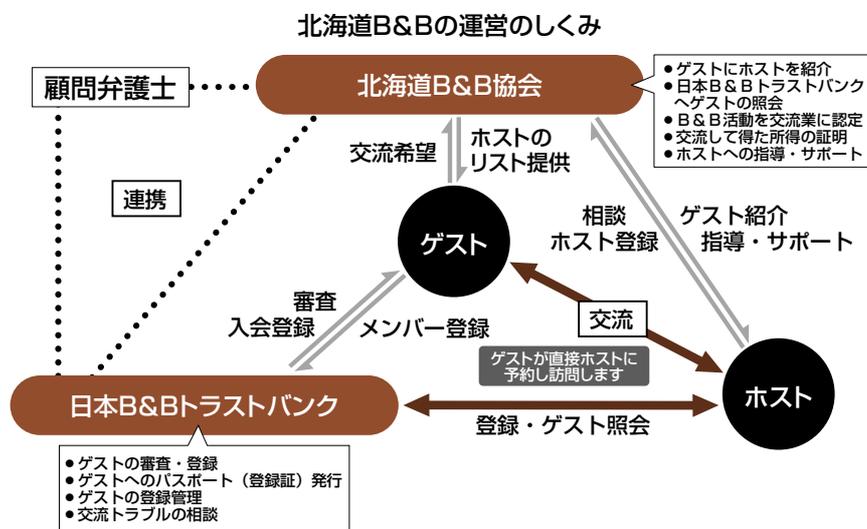
#### 「一宿一飯一趣」

空知地方のまちづくりグループ「270万石空知(ちから)結ばん会」のメンバーは、「自分たちの地域や農業の魅力をもっと都市の人たちに体験・理解してもらいたい。自分たちがあたりまえと思っている毎日の暮らしの中には、都市の人々には知られていないことがたくさんある。逆に都市の人々の考え方を自分たちも知りたい。都市と農村が交流を深めることでお互いにより豊かになれるのでは」と、1998年に「北海道B&B協会」を立ち上げた。

この背景には、グリーンツーリズムの意味を単なる農村観光、農村滞在というようにはき違えると、農村は結果的に受け身となって負荷を強いられることにもなりかねないという危惧があった。

バブルに踊らされた大規模リゾート開発のような例は極端としても、今まで自分たちの街になかったものを準備してサービスを提供しようということではなく、肩肘はらず、虚飾せず、自分たちのありのままの生活の中に遊びに来てもらう。そのリアルさの中での交流が目的である。

このB&Bの活動に賛同した作家の倉本聡氏が、「住んでいる環境の異なる者同士がお互いに信頼し、趣のある交流をしていこう」と



いう願いを込めて、交流のための手段とも言える「一宿一飯」に、本来の目的を盛り込み「一宿一飯一趣」という合言葉を造語し提供してくれた。

### 「宿泊業」ではなく「交流業」

ありのままの家に遊びに来てもらうのだから、余計な設備投資はしない。しかしそれでは、旅館業法などの規制や営業許可の問題をクリアできない。

B & Bの仕掛け人であり現在は理事の横市英夫氏が、つきあいのある弁護士に相談したところ、「お金をとって営業するから規制の対象になる」と助言を受けた。

本来の目的に立ち返って考えれば、宿泊や食事の提供が第1目的ではなく、あくまでも「交流」が主目的である。「交流料」として2,000円もらうほかは、代金はもらわない。ホームステイ（宿泊と朝食）については、ホストとゲスト間の任意である。

また、あくまでも本業や家族の都合を優先させ、時間や気持ちにゆとりがあるときだけゲストを受け入れるというスタンスを明確にした。訪れるゲストもまた、登録を申請し、入会審査を受ける。

あくまでも一般家庭であるホスト宅を訪問するのだということなど、趣旨を承知した人たちだけがパスポートを発行され、登録ゲストとして交流する。サービスを提供する側される側という、商売の関係ではなく、あくまで対等な「会員同士の交流」なのである。

当初7軒からはじまったホストは現在40軒に増えた。ゲストとして交流を体験したのちにホストとなる家も多い。空知に限らず、都市部、道外、さらには海外（ロンドン）のホストも登録された。またホスト宅は農家や酪農家ばかりでなく、主婦、自営業、自由業から公務員に至るまで、あらゆる職業の人々が登録されており、各ホストそれぞれの本業や生活、趣味を活かしてさまざまな交流が行われている。

### 空き農家バンク

離農した空き農家や空き部屋などは、過疎

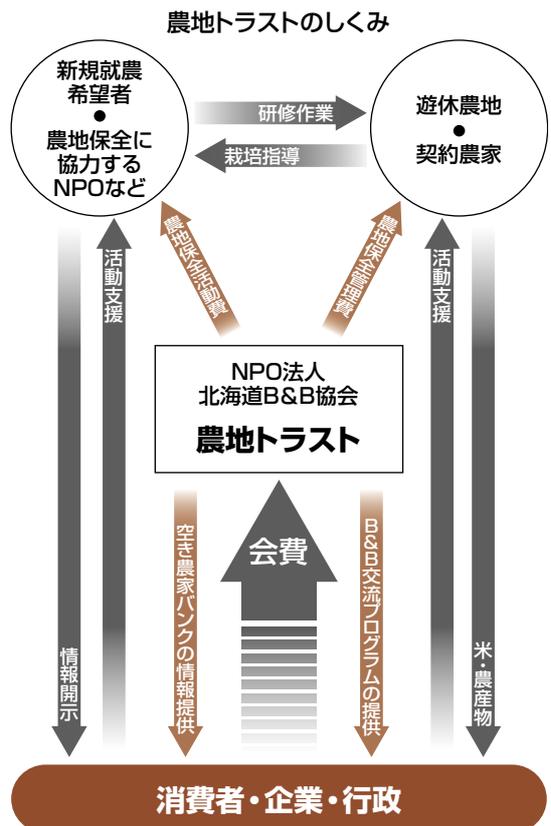
の象徴ともいえる。活用されずに放置されているのは、決して使い道がないわけではなく、使われる機会に接するタイミングを失っているだけだったかもしれない。空き農家や空き部屋をホームステイや交流プログラムに活用するのがB & Bの出発点だったが、こんどはその空き農家そのものを紹介したら使ってくれる人がいるはずだと考え2001年にはじめたのが「空き農家バンク」だ。

B & Bの交流事業をしなければいけないとか、農業をしなければならないというような制約はなく、ただ単純に、空いている農家を活用してくれる人に紹介する。提供する側も、売却でも賃貸でも条件付き貸し出しでも構わない。優れた環境の中で比較的大きな規模で建っている空き農家は、日の目を見ずにいたが、光の当て方を少し変えるだけで、地域活性化のための資産にもなる。

ホームページなどで紹介され、これまでに数件の空き農家が活用されるようになった。

### 農地トラスト

ヨーロッパのグリーンツーリズムの根底に



は、小規模の環境保全型の農業を営む農家の所得保障的な意味合いもあるのだという。農地の環境保全にお金がかかるのであれば、それを負担するのが農村だけである必然はなく、最終的に消費をする都市部からも負担される形であるのが望ましい。しかし、現状に負担を上乗せするだけでは理解は得られない。最初から共に負担するしくみがあれば抵抗なく受け入れられる。

2002年、農地保全の資金負担を最初から組み入れた「農地トラスト」を立ちあげた。その仕組みはこうだ。

会員は年会費を払う。1口5千円、1万円、5万円の3コースあり、それぞれ12kg、25kg、140kg（現地受取または着払宅配の場合）のコメの還元が受けられ、同時に交流プログラムのパスポート発行手数料も含まれている。消費者は生産者が明確で安心なコメを受け取ることができ、生産者はコメの購入を予約された形になり計画的に生産できるうえ、食べてもらう人の顔が最初から見えるので、生産に対する意識も変わる。直接取引することにより浮いた流通マージンを農地保全の資金にまわすことができる。繰り返すことで、消費者は農地保全の成果を直接享受することになる。生産者にも消費者にも負担がかからず、相互にメリットを受けられる仕組みだ。

また現在は既存の契約農家が主流だが、新規就農希望者を募り、契約農家から栽培指導を受けるとともに、契約農家は新規就農者の労働力の提供を受けるといった仕組みも組み込まれている。還元される農産物についても、今はコメが主だが、コメに限らずあらゆる作物に拡大していく。

### ダム底土の再利用

農地保全の一環として、今年度から札幌開発建設部と共同で、雨竜町の尾白利加（おしらりか）ダムに堆積している土（堆砂）の再利用に取り組みはじめた。暑寒別岳や雨竜沼湿原の下流にある尾白利加ダムでは、計画堆砂量の5倍を越す85万立方メートルの土が堆積している。ダムにとっては貯水量

が減り、まさに「お荷物」であるが、主に土捨て場がないなどの理由でどこのダムでも計画通り堆砂除去が進んでいないのが実情である。しかし、生活排水のない上流から流れてきた堆砂は、森の腐葉土などから有機物が集まり、農薬などで疲弊しつつある農地の再生に有効であると注目されている。

札幌開発建設部の事業としてダムから堆砂を採取、分析し、B&B協会はそれを受け入れる圃場を用意し、生育と圃場再生の実証を行う。ダムと農地の両方をリフレッシュできる。

### 量から質の時代へ

人口も経済も成長を続け、量的に伸びてきた時代は終わり、人口も減少に転じ、経済もこれ以上大幅に拡大しない21世紀は、成熟と洗練が求められている。

新たなものをつくりつづけるのではなく、今余っているものにも目を向け有効に活用し、質を高めていく。新たに過度な負担をすることなく人と人との接点をつくる交流プログラムや、安心安全を高める農地トラスト。空き農家や農地の有効活用。ダム堆砂や建設業者の労働力。B&B協会の活動はいずれも今あるものの中での成熟と洗練で共通している。これからの時代をつくって行くための大きなヒントであるように思う。

NPO法人北海道B&B協会  
<http://www.bandb.jp/>



開発局と共同で堆砂を活用することになった尾白利加ダム